

ご門主ご臨席で「平成30年7月豪雨1周忌法要」

中四国5教区合同で営む

広島別院



西日本を中心に土石流や浸水など甚大な被害を引き起こし、多くの人が犠牲となった「平成30年7月豪雨」から1年。広島市中区・広島別院で7月12日、山陰・四州・備後・安芸・山口の5教区合同の1周忌法要が、ご門主ご臨席のもと営まれた。遺族35人を含む350人が参拝し、犠牲者を追悼するとともに、苦しみを背負った多くの人々と、復興に向かって共に歩みを進めることを誓った。

阿弥陀経のおつとめの後、ご門主はお言葉で、「1年が経ちましたが、ご家族やご親族、ご縁の方を亡くされた方の悲しみ、また、避難生活を余儀なくされて住み慣れた場所を離れなければならなくなってきた方の苦しみや不安は、今も変わることがないと思います。あらためて災害によって亡くなられた方に哀悼の意を表しますとともに、被災された皆さまにお見舞い申し上げます」と哀悼の言葉を述べられた。

続いて、復興作業に尽力する広島県呉市安浦町市原地区の自治会長・中村正美さん（69、東広島市・慶雲寺門徒）が、現状とこの1年を語った（別掲）。

岡山県笠岡市・本林寺の宇田忠夫住職とともに参拝した同寺門徒の下田幸子さん（58）は「真備町にある私の会社を拠点に、災害直後から多くの本願寺のボランティアさんが活動してくださった。また、多くの方々の義援金のおかげで、思っていた以上に早く復旧してきたように感じる。しかし、心の傷は深く、雨

苦しむ人々と共に歩むこと誓う

が降るたびに不安になり、いつでも避難できるように準備をするという方もおられる。本当の復興はまだ先」と語った。

広島県坂町小屋浦の自宅に土砂が流れ込んだために亡くなった大島祐子さん（当時96歳、同町・西昭寺門徒）の息子・大島宏さん（71、広島市西区在住）は「悲しみが癒やされることのない、あっといふ間の1年だった。毎日、母の家まで通い、朝食から夕食までを一緒に過ごしてきた。7月6日、いつものように母が夕食を食べるのを見届け、『また明日ね』と別れたのが最後。一人でどんな思いをしていただろうかと思うと悔やまれるばかり。母の顔が穏やかだったのがほんの少しの救い」と目頭を押さえていた。



親を亡くした大島宏さん、英美さん夫妻

お言葉を述べられるご門主

法要前後に、本堂に設けられた焼香台で手を合わせる参拝者

